

戦旗社

東京都新宿区番町10の8
コーポハッピービルE1号
電話 03 (356) 2982
板替東京26110

9月20日

5日、20日発行

349号

編集発行人 鹿島 昂

一部50円

帝国主義の腐朽性に抗し
共同反革命を蜂起-内戦へ！
共産主義者同盟（戦旗派）

戦旗

日帝—寺尾を決死糾弾！ 狭山九月決戦の歴史的な大勝利へ！

八・二八現調、八・三二、九・三死闘を
上回る九・二六大決起へ！！

全国の革命的労働者・学生、高校生諸君！ 戦旗購読者の皆さん！
わが同盟戦旗派は、狭山差別裁判糾弾！無実の石川氏即時奪還！ 日帝—寺尾体制打倒の旗を鮮明にかかげ、この十二年の間太陽も月も星空も仰ぎ見る事の出来なかつた石川氏の苦節に何としても応えるため、狭山差別裁判のまさに正念場とも言うべきこの八・九月を、「死闘の二ヵ月」として、血債・猛省をかけ総力をあげて闘い抜き、狭山差別裁判の歴史的勝利に向けて邁進することをすでに明らかにしてきた。

一九六三年狭山事件発生以来、別件逮捕され、国家権力—狭山署の拷問にさらされ、ウソの「自白」を強要され、そして一審浦和地裁では、類を見ない「悪魔非道の極み」の犯行として内田裁判長により死刑を宣告され、以後十二年にもわたりわずが三畳足らずの密室に監禁されてきた石川氏の苦しみは、はかり知れないものがある。

われわれは、石川氏のこの苦しみ、そして更に石川氏のみならず六千部落三百万部落民が部落差別によって同様の苦しみを強いられ、日夜呻吟しているという事実が、自らが部落民を始めとする被抑圧者であり続け、憎むべき差別者であったことに無自覚であったことの結果許してしまつたことなのであることを階級的に反省し、この猛省精神、血債の思想をもって狭山九月決戦絶対勝利を戦い取る決意でいる。

われわれはこの固い決意で全身を打ち固め、日帝—寺尾の三・二二暴挙を決して許さず、五・二三の二万人の決意による大逆襲を断固受けつぎ、狭山九月決戦の爆発的突破口を切り開く闘いを、八月三十一日狭山現地における日帝—寺尾決死糾弾のハンストライキによって開始した。

八月三十一日

十二時、突如西武線入間川駅前に登場した戦旗派と埼玉糾弾共闘の労学は、駅前に用意したテントの設営を開始する。アレよアレよという間にテントの設営を完了し、ハンスト突入の立て看板をテントの前に立てる。大鉄塔、電柱には長さ十メートルもの「狭山差別裁判糾弾！ 無実の石川氏奪還！」のぼりが三本立てられる。この間十分。

駅前大交番にいた日帝—寺尾の手先—狭山署員は、一瞬何が起つたか分らず目を白黒させるが、日帝—寺尾決死糾弾のハンストだと分ると顔面蒼白になり、あわてふためいて本署に電話し、ハンストの様子を見に来て、すきあらば弾圧しようとする様子を見う。

わが部隊はテント設営に、狭山署のそのような敵対を寄せつけず、テントに一指も触れさせない強固な防衛態勢をしき、狭山市民に「狭山差別裁判糾弾！無実の石川氏即時奪還！日帝—寺尾体制打倒！」の宣伝活動に入る。日帝—寺尾決死糾弾のハンスト突入の闘争宣言のピラが駅前のすべての人々にまかれる。ピラを受けとった市民はくい入るようにピラに見入り、われわれの日帝—寺尾体制打倒の現地闘争への連帯を示し、「ガンバレヨ」の激励を寄せる。

十二時二〇分、警察と結びついた入間川駅長水沼が、獄中の石川氏と固く連帯して闘っているハンストのテントを撤去するようやってくるが、血債・猛省をかけた狭山九月決戦絶対勝利の決意に燃えるわが部隊の反撃の前に追い返される。

わが革命的労働者、学生は、狭山署、入間川駅の敵対を寄せつけず、その後、石川氏の無実即時奪還を訴える、アジテーション、ピラ配布を続ける。

三時三〇分、首都圏から日帝—寺尾決死糾弾ハンスト支援の労働者、学生、高校生が、ぞくぞく到着、雨の中駅前集合が行われる。発言に立った労共闘の同志は、「十年間にも及ぶ石川氏の不屈の闘闘精神に学び、石川氏の闘いに連帯するために、一カ月のハンストを最後まで闘い抜く。このハンスト闘争は、



狭山現地入間川駅頭でハンストに突入



夜半ハNST隊に襲いかかる狭山署公安共

わが部隊は隊長室に追しかけ、そのような水沼を徹底的に糾弾していくが、糾弾に耐えきれず水沼は逃亡する。だが日帝寺尾の手先となり、石川氏奪還の闘いに敵対する水沼を許しはしない。

午後九時三〇分、国家権力狭山署と西武鉄道入間川駅長は遂に絶望的な暴力行為に出て来る。駅前の狭山市民が少くなるのを見計らって、隠然とハNST闘争を圧殺しようというのだ。狭山署だけなく埼玉県警から急拠かき集めた機動隊二五〇名と入間川駅員は、隊長水沼を先頭にテントに襲いかかる。ハNSTメンバーと固く連帯してテントを守っている防衛隊がまず襲われる。機動隊、入間川駅員の殴る、蹴るの暴力により、テントの防衛隊は必死に抵抗したが排除され、テントから引き離される。豪雨の中にもかかわらずハNST闘争を見守っていた市民からは口々に「止めろ!」の声が機動隊、駅員に浴びせられる。

彼らは今度はテントに襲いかかる。テントの柱が折られ、天井が引きちぎられる。ハNSTメンバーが引きずり出され、テントの外に放り出される。立てられていた旗が引き倒される。九時五〇分、狭山署、機動隊はテント他すべてを奪い去り、その跡に隊長水沼がロープを張り、「立入禁止」の札を立てる。

部隊は雨の降りしきる中、交代で狭山市民に対する情宣活動が続ける。宣伝カーからも、狭山事件が権力によってデッチ上げられた差別犯罪であることが明らかにされ、石川氏を即時奪還しなければならぬことが訴えられる。

この間駅前交番では警官が増員され、何度も公安の覆面パトカーが駅前を徘徊する。

七時二〇分、狭山市民の見守る中、駅前で再び集会が開かれる。ハNSTに革命的に突入したメンバーからは、獄中に十二年も閉じこめられている石川氏の苦闘に少しでも応え、連帯し、日帝寺尾を決死糾弾するためにハNSTを最後まで闘い抜く決意がはっきりと明らかにされる。この決意を全員異議なしで確認し、ハNST死守、石川氏即時奪還の決意が更に打ち固められる。

夜八時、日帝寺尾決死糾弾の現地ハNSTが狭山差別裁判弾闘争の大爆発、九月決戦の発火点となることを恐怖した国家権力狭山署の意向を受けて、入間川駅長水沼がテントを撤去しよう言いに来る。この四度目の入間川駅のハNST闘争への敵対も、わが部隊により粉碎される。撤去の理由と言ふもの「(駅長の)面子が立たない。邪魔になる。」というのだ。無実の部落青年石川氏が部落差別により死刑にされようとしているのだ。日帝のこの権力犯罪を糾弾し、石川氏を奪還する革命的ハNST闘争に対して「邪魔になる」とは何と

いふ言草だ。そのような闘いを邪魔に思うのは国家権力以外にあるのだろうか。更に入間川駅長水沼は、われわれの追求に対し、「西武鉄道は狭山事件とは関係ない。石川氏がどうなるかと構わない」「狭山には部落はない」などと居直り、権力とゆ着した反動的対応をとっていったのだ。

わが部隊はそのような暴行を働き、狭山差別裁判弾闘争を弾圧する機動隊、入間川駅員を徹底的に糾弾し続ける。土砂降りの雨をついて、駅前交番に向って抗議・糾弾のシュプレヒコールを何回も繰り返す。そして坐りこんで日帝寺尾の石川氏に対する死刑判決策動の尖兵となっている狭山署、西武資本への糾弾の集会を開始する。すると先程石川氏に連帯して日帝寺尾決死糾弾のハNSTを襲い、テントを奪い去った機動隊が再びわが革命的労働者、学生に襲いかかる。彼らはわが部隊を両側からはさみこみ、一人一人の腕をかかえて二百メートル程離れた狭山中央公民館まで連行し、その広場に閉じこめる。十分位して彼らは引揚げるが、わが部隊は、ハNSTに加えられた暴挙はまさに獄中十二年の石川氏の闘いに加えられているものと同じであり、狭山差別糾弾闘争の前進とその爆発に恐怖した日帝国家権力による先制攻撃なのだといふことをはっきりと見てとり、更にそこで糾弾の集会を貫徹する。そして石川氏の苦節十二年の闘いに何としても応え、日帝寺尾体制打倒の決死糾弾のハNSTを断固として継続する決意を打ち固め、翌一日の闘いを狭山署の敵対を決して許さず戦い取る意志統一を行い、散っていった。

九月一日

翌九月一日、前日狭山署、入間川駅の狭山差別裁判弾の闘いへの反革命的敵対に抗し、断固闘い抜いた戦闘的労働者、学生、高校生は、朝九時、行動を開始した。まず初めに、二五〇名の機動隊員を差し向け、革命的ハNST闘争を弾圧してきた、狭山署に到着したわが部隊は、そこにいた署長

代理をつかまえ、昨日の暴力的テント撤去を糾弾していったが、署長代理は「昨日自分はいなかったのだからそのことは知らない。仕事の邪魔になるから出ていってくれ」と反動的にも自らの責任を回避し、居直ろうとしたが、そんなことが許されるはずはない。わが戦闘的部隊は署長代理を追求し、署長と三十一日の警備責任者と呼んで来させるまでに追い込んでいった。

署長代理がわが部隊の鋭い追求の前になすすべを失い、助けを求めたためにしぶしぶ出て来た署長は、「昨日は駅からの要請でテント撤去時の妨害を防ぐために警官を出動させた。警察は妨害を排除しただけで、撤去は駅員がやった」と言い、事実を隠蔽しようとした。だが警察機動隊が先頭に立ってテントを破壊し、血債をかけ石川氏との連帯を打ち取るべく決死糾弾のハNSTを行っていたメンバーを引きずり出したことは、一般市民をはじめ皆が見ているのだ。わが部隊は、狭山署のこの姑息な言い逃れによる狭山差別裁判弾闘争への敵対の隠蔽をはっきりと見て取り、更に追求する中で狭山署がテント撤去をやったことを認めさせ、まさに日帝寺尾の手先として石川氏への死刑策動の尖兵となっていた。狭山署の反人民性を明らかにしていった。それと同時に、その中で国家権力入間川駅との反革命的結束も明らかにされ、駅と狭山署は何度も互に連絡を取り合い狭山九月決戦の突破口を切り開く烽火たるこのハNST弾圧の機会をうかがっていたこと、駅が要請書を書いて機動隊を呼んだことが明らかにされた。

このぎりぎり締めつける追求にいたたまれなくなった署長は、公安を先頭とする数十人の警官を使ってわが部隊を排除する暴挙に出してきた。

しかしながらわが部隊は、狭山署の玄関前で態勢を整え直し、狭山差別裁判弾、狭山署の反革命的敵対を許さないぞのシュプレヒコールを何度もたたきつけ、集会を貫徹し抜いていった。そして前日機動隊により奪い去られたテント他一切のものをすべて奪還し



再び狭山市役所前でハNSTを貫徹

た後、狭山市中央公民館に向った。

そこで少しの休息の後、一隊は総決起集
会の準備に向い、残りテントの再設営に
取りかかった。一時二〇分、再びハンスト
のテントが二個、狭山市役所の真前の中央
公民館の芝生の中に作られた。前日と同じ
ようにのぼりが立てられ、立て看板が出さ
れる。そして中央公民館の壁には「狭山差
別裁判糾弾！ 無実の石川氏即時奪還！」
の看板が取りつけられ、狭山市民に対し、
狭山九月決戦絶対勝利が強く訴えられる。
午後二時、他の部隊が中央公民館に結集
して来る。そして二時半より「日帝寺尾
決死糾弾！ 狭山九月決戦絶対勝利！ 総決起
集会」が開催される。集会に結集した三〇
〇名の労学市民は、はじめに石川氏の御両
親からの挨拶を受け、石川氏即時奪還を固
く確認していった。続いて映画「俺は殺し
てない」が上映され、「差別・無実」の決
意がみな切れる中、石川氏のスピーチが読み
上げられた。集会参加者は、石川氏の獄中
からの血叫びを一語一語心にきざみつ
け、血債・猛省にかけて狭山決戦に勝利す
ることを意思統一していった。

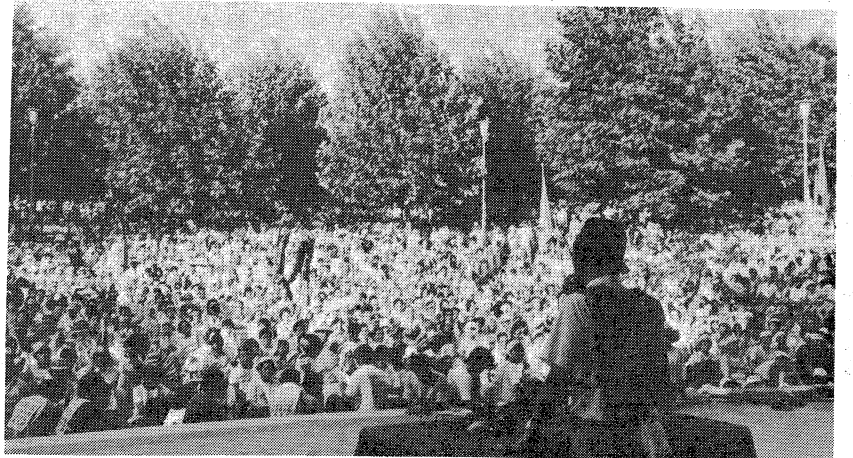
労共闘の同志の基調報告のち、ハンスト
を闘い抜いている戦士の決意表明に対し、
全員拍手で激励を送り、共に日帝寺尾を
決死糾弾することを確認し、筑波共闘、高
共闘、埼玉糾弾共闘の決意表明のあと、狭
山市内のデモに出発していった。

「狭山差別裁判糾弾！ 無実の石川氏即時
奪還！ 日帝寺尾体制打倒！」を高くか
と訴える赤ゼッケンの隊列を、狭山市民は拍
手で迎え、連帯の気持と激励を送ってい
った。わが部隊は豪雨にもめげず、沿道の人
人のすべてに石川氏の完全無実を訴えてい
った。そして入間川駅前では、前日のハン
ストのテントを撤去した狭山署と西武資本
の糾弾のシブプレヒコールをくり広げ、駅構内
に突入し、駅長水沼を糾弾するシブプレヒコ
ールを上げていった。そして中央公民館に
戻り集会を続行していったが、わが部隊の
狭山九月決戦絶対勝利の固い決意におびえ
た狭山署は、さらに装甲車の機動隊を呼ん
で弾圧せんとする策動を強めていった。だ
が血債・猛省にかけて狭山九月決戦の勝利
を闘い取らんとしているわが革命的労働者
学生は、日帝国家権力のそのような策動
が狭山差別裁判の前進によりもたらされた
密集した反革命なのだということを間違
なく見て取り、日帝寺尾の打倒を何とし
ても戦い取ることを確信し、雨の降りしき
る中、集会を貫徹し、狭山署を糾弾し、抜
いていった。

午後五時半、狭山市の教育長がやって来
て中央公民館でハンストをやるのは困ると
いつてきた。狭山市は八月二十六日、市議
会で狭山差別裁判糾弾を決議しているが、
石川氏即時奪還のハンストに対するこの及
び腰をわが部隊は徹底して糾弾し、一カ月
のハンストを断固として闘い抜く決意を打
ち固め、集会を終えていった。

九月三日

九月三日、狭山差別裁判第七六回公判闘
争当日、わが戦旗派と革命的労働者、学生
は、朝七時某所に結集して、狭山現地の
ハンストと固く連帯して公判闘争を闘い抜く
集会を克ち取っていった。発言に立った労



万余の部落大衆に決死糾弾を訴える労共闘笠置氏

共闘の同志は、「われわれは狭山現地での
決死糾弾の闘いと高裁包囲のたたかいを更
に結合させ、『狭山差別裁判糾弾！ 無実の
石川氏即時奪還！ 日帝寺尾体制打倒！』
の旗を高くかかげて狭山差別裁判糾弾闘争
を前進させよう」と訴え、圧倒的確認され
ていった。

そして三五〇名の部隊はデモで日比谷公
園に入り、「糾弾・奪還・打倒」の下に闘
っている戦闘的部落大衆、労働者、学生と
の連帯を克ち取っていった。

公判闘争は九時半頃より開始され、司会
の挨拶の次に挨拶に立った石川氏の母親か
らのことばを集会に結集した全員がしり
りと受けとめ、石川氏即時奪還の決意をう
ち固めるとともに、石川氏の闘いを最も支
えている御両親に対し限りない連帯の拍手
を送っていった。

続いて傍聴団の代表からは、「道理が通
って無理がひっこむように、石川氏の無罪
を獲得しなければならぬ」との訴えがな
され、全員の拍手で傍聴団を送り出してい
った。そして九時四十五分には、石川氏と
の連帯のシブプレヒコール「石川さんガン
バレ」の声を日比谷にとどろかせ、みなぎ
る決意を明らかにしていった。

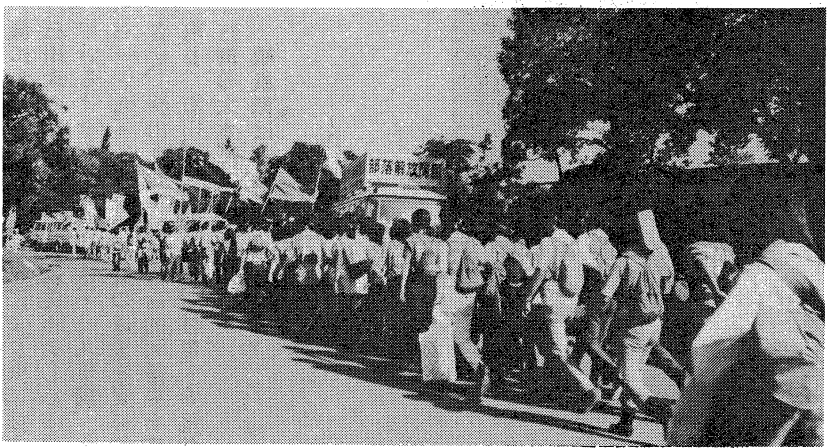
続いて集会は、狭山差別裁判勝利を訴え
て全国を行進してきた行動隊を拍手で迎え、
その闘いの報告を受けていった。行動隊を
代表して松井氏は、「名古屋、鹿児島を起
点に、五隊に分れて炎天下、雨の中、風の
中行進してやっと到着した」とその労を語
りながら大行進の報告を行い、行動隊員一
人ひとりの自己紹介には結集した全員は割
れんばかりの拍手で応えていった。
その後行動隊員の決意表明を全体で確認
した後、拍手で彼らを送り出し、行動隊の
苦勞に伝えていった。

集会はその後、解放同盟関東ブロックの
各挨拶を受け、石川氏の弁護を担当して糾
弾闘争を闘い抜いている山上弁護士の「残
された六回の公判で石川氏の無罪を明らか
にする」との決意表明を最後として午前の
部を終えていった。

午後に入って冒頭に石川氏からのスピーチ
が読み上げられた。その中で石川氏は、「現
実の厳しい闘争下において尚且つ寺尾への幻
想を打ち切れ」ない融和主義的団体が存在し
ていることを警告し、部落民、労働者人民の
闘いが大合流を克ち取り、人民内部の差別構
造がこの狭山闘争によって打ち破られつつあ
ることが狭山差別裁判糾弾闘争の大昂場を
実現する根拠になっていると指摘した。そして
日帝寺尾に一片の幻想も抱くことなく断固、
狭山事件の核心点―警察・検察・裁判所の一体
となつての部落民に対する社会意識としての
差別的偏見と予断による犯人デッチ上げ―を
鮮明に打ち出して闘って行くよう要請された。
石川氏のこのスピーチは、獄中十二年の苦闘
の血叫びであり、集会に参加したすべての部
落大衆、労働者学生は、この石川氏の言葉を
しっかりと把え返し、狭山差別裁判糾弾闘争
の歴史的勝利に向って共に前進していくこと
を固く確認したのである。

石川氏のスピーチの後、支援団体から連帯
の発言を受け、山上弁護人から公判の報告が
あり、石川氏御両親の挨拶を満場の拍手で確
認し、デモ行進に出発していった。数キロに
も及ぶデモ隊は、帰宅途中の労働者、市民に
狭山差別裁判の差別性を訴え、無実の石川氏
の即時奪還の闘いへの支援と連帯を訴えてい
った。そして常盤橋公園までの戦闘的デモを
闘い抜き、九・三公判闘争を終えていった。
全国の同志友人諸君！ 狭山差別裁判糾弾の
闘いを融和主義の介入を粉砕して闘い抜いて
おられる戦闘的労働者、学生の皆さん！

狭山差別裁判糾弾、無実の石川氏即時奪還
の闘いは、九月決戦に突入し、日帝寺尾を
して日共、カクマルの融和主義との熾烈な対
決に入っている。五・二三公判への石川氏の
スピーチにもあったように、大衆的人民の団
結で日帝寺尾を打倒し、狭山闘争勝利の大
水路を貫通できるか否かがわれわれ戦う主体
にとり決定的に問われているのだ。われわれ
は、この決定的に重要な狭山九月決戦を総力
を挙げ、持てるすべての力を發揮し、石川氏
の苦節十二年に何としても応えるべく、絶対



血債をかけて奪還を叫ぶ戦旗派350の隊列

勝利しなければならぬ。
 石川氏の獄中からのアピールは、まさに血叫びとしてわれわれを奮い立たせ、日帝寺尾打倒の揺ぎない確信を与えてくれる。そのような血叫びに心を動かされない人民がいるだろうか。
 われわれは石川氏のこの叫びに何として応え切り、抑圧者、差別者としての血債・猛省精神にかけて狭山決戦に絶対勝利し、石川氏をわれわれ闘う人民の手にしっかり

と取り戻し、日帝による部落民、被抑圧人民へのこのような暴挙を決して許さない決意をもう一度ここで打ち固めなければならぬ。
 八・三から九・三の連続的死闘は、そのような石川氏の獄中十二年の闘いに少しでも応えざるものとして闘い抜かれた。その闘いは石川氏の血叫びに比べれば未だ不十分なものが、だがわれわれはこの連続闘争の貫徹によりこじ開けた日帝寺

尾体制打倒の切り口を、狭山九月決戦を血債にかけて闘い切ることにより更に拡大し、石川氏の即時奪還へと結実化せしめる決意である。全党全人民は八・一八現調、八・三一〜九・三連続的死闘の成果を更に発展させ、狭山九月決戦の革命的大爆発を克ち取り、石川氏の即時奪還、日帝寺尾体制打倒の大水路を切り開け！
 戦旗派はその最先頭で闘う。

狭山現地——高裁を貫く実力闘争で 日帝寺尾の完全打倒へ

八・一八全国現調を三八〇で貫徹

石川氏の獄中十二年の苦闘をわがものとし、狭山九月決戦勝利の突破口を切り開く八・一八現調は、全国各地の革命的労学の大結集をもって闘い抜かれた。

権力寺尾警察署の部落差別に基づくデッチ上げ逮捕以来、一審での死刑判決、そして以後十二年にも及ぶ石川氏の不屈の闘いに学び、血債の思想・猛省精神をもって日帝の差別・分断攻撃を許さず、

朝九時、入間川駅に到着した三八〇名の部隊は、現地調査に出発する前に、意志統一の集会を克ち取っていった。

一九六〇年五月一日、「善枝ちゃん事件」の発生と死体発見以降の警察権力の捜査の過程は、すべて部落差別に基づいた偏見の行動であること。すなわち、身代金を取りに来た犯人を取り逃したことに糾弾の的となつた国家権力警察は、自らの絶望的窮地からの脱出を、部落差別を利用してことにより部落民を犯人にデッチ上げ、部落民に対する一般民の差別意識を増長させることによりなそうとしたのであり、それ故そこには、人民の分断をもつて支配を貫徹せんとする日帝国家権力の人民支配のしくみがくつきりと描き出されているのであり、われわれは、そのような日帝支配の構造をはつきりと見すえ、常にその犠牲となつている部落民・中朝人民の立場に自らの身を置き、日帝の差別・分断攻撃と対決していかねばならない。

そして更に、この現調の中で差別・無実の確信を揺ぎなきものとし、獄中十二年の石川氏の苦闘に学び、狭山九月決戦の突破口を切り開くこと。
 このことを確認した革命的労学は、差別裁判糾弾のみならず決意で現地調査に出発した。

部隊はまず、狭山事件発生時の石川氏の実際の行動コース入間川駅から八百屋・たばこ屋へ至る一歩を歩き、石川氏のアリの点を曇りもなく確認していった。そしてこの確認の上に立ち、次にデッチ上げ「明白」の中で石川氏が歩いたとされているコースをたどっていった。

蜂起プロ独派の部隊は、この「明白」が部落差別故に小学校も出られなかった石川氏の、「無知」を徹底的に利用して権力にデッチ上げられたものであり、このことは抑圧民たる自己の帝国主義的実存がまさに差別・被差別の関係の中で明確に差別者として存在しており、排外主義に知らず知らずの間に屈服していた結果故に石川氏の「明白」を許してしまったものであることを痛苦にとらえ返しつつ歩き抜いて行った。

荒神様では、当日祭礼にもかかわらず通つたとされている石川氏を見た人は誰もいないこと、そして警察は「明白」のつじつまを合わせるために氏子総代らに対して石川氏が通つたと証言するよう強要したが失敗したことを確認し、無実の石川氏を殺人犯にデッチ上げんとした国家権力を徹しく糾弾していった。そして出会い地点とされてい

被抑圧人民と連帯すべく決意を固めた三八〇名の戦闘的労働者・学生は、この全国現調を闘い抜く中で、差別・無実の確信を更に打ち固め、狭山九月決戦を総力で闘い切ることを意志統一し、とりわけ石川氏の即時奪還を血債にかけて実現し、日帝寺尾体制打倒の大水路を切りひらくことを決意したのである。

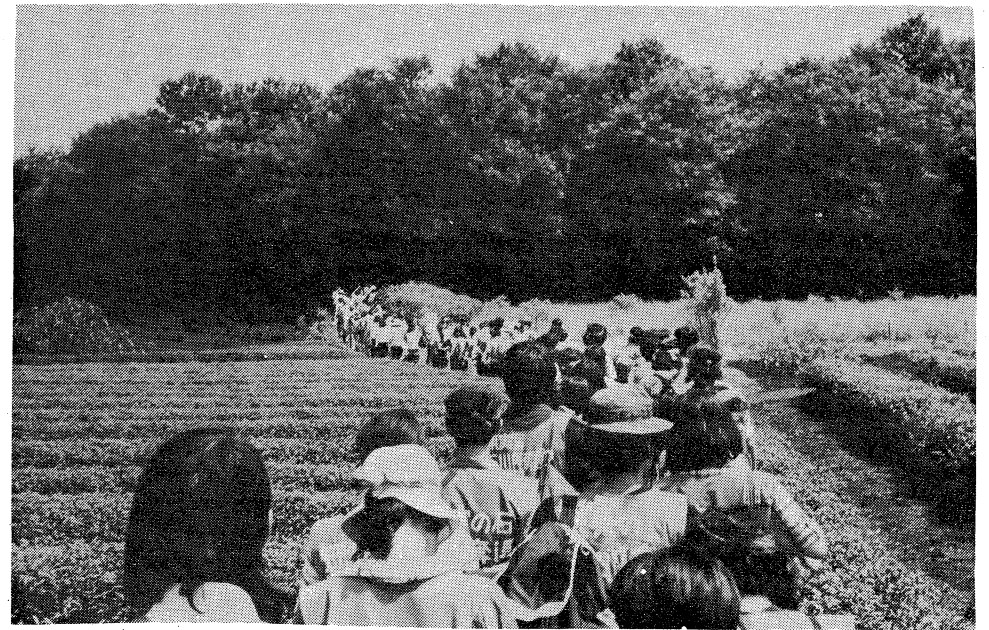
その所では、見ず知らずの石川氏が中田善枝に「ちよつと来い、用があるんだ」と言っただけで中田善枝が石川氏のあとをノコノコとついて来たという「明白」の偽瞞性、明らかにデッチ上げ以外の何物でもないことを見て取り、石川氏の「差別・無実」を更に打ち固めていった。更にこの明白なデッチ上げ事実についての検察側の弁解「居直り」「中田善枝は」蛇ににらまれたカエルのようについて行った」については、中田善枝「カエル」純真で善良な人、石川氏「蛇」恐ろしい人間と両者を描き出すことにより、部落民に対する偏見を増長するものであり、権力による更なる差別分断攻撃であり、断じて許してはならないものであることをはつきりと見てとり、血債にかけて糾弾し抜くことを意志統一していった。

続いて犯行現場とされている所、死体発見現場、そして四



佐野屋脇の農道を行く380名の現調隊

十数名の大捜査体制をしきながら、身代金を取りにきた犯人を取り逃した佐野屋前、更に犯人が逃げた農道等を踏破し、最後に部隊は数キロに及ぶデモ行進を貫徹して「狭山差別裁判糾弾



死体発見現場の茶畑を行く血債・猛省隊

結審一死刑判決策動粉碎ノ石川氏即時奪還ノシニプレヒコイルをあげながら石川氏宅に着した。

ここで戦闘的労学は、石川氏の御両親から万年筆発見時のドラマな話を聞き、決意を打ち固めるとともに、石川氏御両親との連帯を克ち取り、狭山九月決戦への総決起、まさに自らの血債・猛省をかけた日帝寺尾体制との死闘を意志統一していった。

全国の戦闘的労働者、学生、高校生諸君ノ市民の皆さんノ八・一八狭山全国現調は、労働者、学生、高校生の圧倒的結集により、狭山九月決戦の突破口をこじあげた。われわれは石川氏の生死を決する九月決戦に向けたこの八、九月を「死闘の二カ月」ととらえ、まさに自らの帝国主義的実存の止揚を、血債・猛省をかけた闘い抜くものとして実現し、日帝寺尾体制打倒を同盟の総力をあげて闘い取る決意を明らかにしてきた。

日帝寺尾は三・二二暴挙により結審一死刑判決の意志を露骨に表明し、何が何でも石川氏を権力支配のいけにえにせんとした。しかしこの策動は、五・二三公判への解放同盟を先頭とする革命的労働者人民の二万人の決起により完全に破産をつきつけられてしまったのだ。この大逆襲により、国家権力は人民の手でその首根つこを押えられ息もたえだえとなつていく。しかしわれわれはこの反撃で決し

て手をゆるめなくてはならない。窮地に追い詰められた権力は、それ故必死の反撃に出ることは自明であり、それ故われわれはこの八、九月を「死闘の二カ月」として、血債・猛省をかけて闘い抜かねばならないのだ。

われわれは八・一八現調で、第一に、自らの身体で一步一步狭山現地を歩くことにより、差別にもつづいた自白の不当性を一点の曇りもなく確証した。石川氏と中田善枝との出会いから犯行に及んだとされている過程が権力の全くのデッチ上げによるものであり、それ故到底あり得ないものであることを全ての労学は確認した。そして教科書の発見や万年筆の発見状況そのものが、「自白」を完全に破綻させていることを確認し、日帝国家権力に対する激しいきどおりと糾弾を浴びせていった。

まさに石川氏の無実を明々白白であり、狭山裁判は部落差別にもつづくデッチ上げ差別裁判であり、われわれはそのことをはつきりと見据え、石川氏即時釈放、日帝寺尾体制打倒を血債・猛省にかけて実現し抜く決意を揺ぎないものとした。

第二にわれわれは、この全国現調を「死闘の二カ月」の中で戦闘的労学の圧倒的決起をもって大成功のうちに貫徹しきることにより、結審一死刑判決路線を突走る日帝寺尾に対し、先制的痛打を与え、日帝寺尾体制打倒の革命的突破口を切り開くものとして闘い抜き、寺尾の

結審一死刑判決策動を粉碎する革命的地平の第一歩をしっかりと踏みしめたことを確認しなければならぬ。

この第一歩は五・二三大逆襲の成果を受け継ぎ発展させるものとして、「死闘の二カ月」の中にはつきりと位置づけられなければならない。

日帝寺尾による石川氏への死刑判決策動こそは、差別・抑圧の増長・強化をもって延命せんとする日帝の労働者人民に対する攻撃なのであり、われわれはこの攻撃に屈して石川氏を死刑においやめるのか、それとも寺尾を打倒して石川氏の奪還を克ち取るのか、という決定的立場に立たされていることをはつきりと踏まえ、石川氏即時奪還の決意と戦闘的態勢を打ち固め、日帝寺尾体制の實力打倒をわがものとしなければならぬのだ。

そして最後にわれわれは、炎天下数キロものコースを踏破し抜くことにより、石川氏の獄中十二年の苦闘を少しでもわがものとし、血債をかけ狭山九月決戦を総力で闘い抜く決意を打ち固め、石川氏との連帯を克ち取っていったのである。

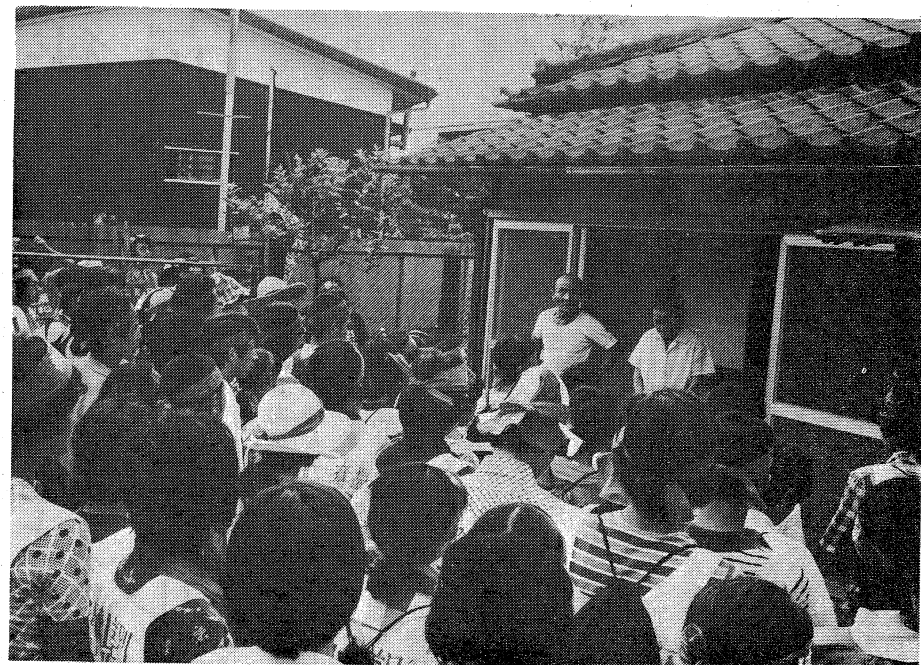
特に、石川氏宅では御両親から話を聞き、石川氏の苦闘の中ではじめて明らかにされた「差別・無実」を全員で確信していったのである。

しかしながらわれわれは、ここで石川氏を未だわが手、年老いた御両親の手に奪還できないでいるという事実を痛苦に把え返さなければならぬ。石川氏

を未だわが手に取り戻せないことは、まさにわれわれの闘いの決定的弱さの現れなのであり、そのことはとりもなおさずわれわれ自身が、過去一貫して差別者・抑圧者として存在してきた結果なのだとこのことを確認しわれわれにはそのような自己の帝国主義的実存からの脱脚を、血債の思想を打ち固め、猛省精神を発揮することが決定的に問われているのである。

八・一八で闘い取った連帯は未だ非常に弱いものである。われわれはこの連帯を九月決戦の死闘の中で更に強固なものとし日帝寺尾体制打倒へと結実化せしめていかねばならない。まさにわれわれは、この八・一八現調で闘い取った革命的地平をしっかりと踏みしめ、それを決して放すことなく、日帝寺尾の打倒へと奮進しなければならぬ。

すでにわれわれは「死闘の二カ月」に突入している。全党全人民は総力を挙げ、狭山九月決戦の揺ぎない確固とした戦闘体制を作り上げ、石川氏即時奪還を何としても実現せよ、石川氏の五・二三アピールに込め、八・一八現調で切り拓いた突破口をさらにこじあげ、日帝打倒の大水路を貫徹せよ、



石川氏の御両親と交流し、決意を固める革命的労働者

九・二日帝・寺尾決死糾弾 狭山九月決戦絶対勝利 総決起集会に寄せられた石川一雄氏のスピーチ

総決起集会にご出席下さった全ての皆様、本日はこの猛暑の中を遠方近よりこの総決起集会にご参加下さり誠に苦勞様存じます。

本日ここ狭山市中央公民館会場に於いて本会が開催されます事、早々から私の支援者であられるMさんの面会にて知らされ、常日頃から狭山事件に対する真相訴えと支えとなつて下さっている支援者各位に一言でも感謝の気持ちをお伝え出来たらと皆様の貴重なお時間の一部を拝借させて頂きました。

さて早速私事になりますが、私の狭山事件は日本帝国主義とその死刑執行人である寺尾は何がなんでも私を断頭台へと送るべく私の無実を立証する全証拠開示請求及び六つの鑑定書の証人の全てを却下したのみならず現場検証も行わず非常に判決を急いでいる事は既に皆様方もご存知の事と思いますが、然し現状の資料でも十分対抗出来るものと私は確信して居ります。

それは多数の弁護人の英知が集結された事もさることながら今日、権力の不正に真正面から立向ってゆく事が出来るようになりました事は一重に支援者各位の正義と真実を求める世論の高まりがバックにあるからであります。

ゆえに私は今こそこの重大な公判を前にしてこそ冷静にそして九月末日に予定されている私の意見陳述を通して広く全国民の間に権力の醜くさとそのデタラメぶりを知って貰うように訴えてゆかねばならないと考えて居ります。まして私の「狭山事件」は単に有り触れた殺人という冤罪事件だけではなく、それを解決しようとした警察の意図や私達の部落民が受けて来た差別と偏見の実態を併せて訴えてゆかねばならないと強く思うのであります。

それにしては現今の狭山斗争の全人民的な大高揚によって追い詰められた日帝・寺尾体制は「民主的」な仮面を自らの手で剥取り、早期結審死刑判決の反人民的路線をあからさまにうちだした事によって狭山斗争はいよいよ重大な局面に突入したことになり、九月の最終弁論がまさに九月決戦として打ち抜かれようとしている今、一切の武装解除は許されず、断固として正規の陣型!!を構築せねばならないと思っております。

この様に日帝・寺尾体制が露骨な攻撃をかけなければならなかった前提には一昨秋の危機にあつて部落解放同盟を筆頭に諸団体の結集の下で狭山差別裁判糾弾斗争の歴史的勝利の突破口として退官前の井波裁判長に六つの鑑定書を突きつけた事によって井波に判決文を作成させず、無為のまま退官へと追い込みと同時に昨秋の再開公判以来の狭山斗争の圧倒的な前進の中ですます明白となりつつある狭山斗争の全人民的な高揚とその歴史的勝利の展望に対する反動的な恐怖の現われの一つと更に二月公判斗争に於ては私の生命をめぐ

って支配階級と支配される人民が真向から対決する決戦場と化したゆえにこの高揚は敵の恐怖となり一刻も早くこの大斗争をしすめなければならぬ三・二の公判に於て証拠調べを却下したのであり、寺尾に課せられた使命は井波体制の継続であり、死刑判決の策動は必至というわけで、従つて寺尾による「事実審理うち切り」の攻撃の重大な意味を徹底的にあげてはならないと思つて居ります。

何故なら寺尾は部落大衆と労働者人民による提起された更新手続きをめぐる裁判全面やり直しの要求をノム事は日帝とその差別裁判強行の体制を根底からゆるがす大爆発の導火線となり権力の体制的危機の大水路となる事の恐怖の現われからであります。

然しここに国家権力が差別裁判糾弾斗争に敵対し、差別的温存拡大すべく大弾圧の攻撃をかけてこようとも恐れるにたらず、あの五月公判斗争に示した如く、九月公判も同様に革命的な高揚を切り開き万全の準備をなす。戦闘的労働者人民の圧倒的決起をもって日帝・寺尾体制に決定的痛打を浴びせることが出来るならば狭山斗争の歴史的勝利の展望は必ずや切り開かれることと確信して居ります。

狭山差別裁判はアジア再侵略を押し進める日本帝国主義の侵略体制構築の為の攻撃である事は今更申し上げるまでもない事であり、それがそれだからこそ今日では日本の労働者階級人民を部落民の闘う結合によって大きく揺れ動いているのであります。私の狭山差別裁判の勝利が未来の三百万部落解放へ直結するのだと思つて、私の生と共に絶対に負けられぬ闘いであり、従つて部落解放斗争の未来と日本革命の命運を賭けた狭山差別裁判をめぐる攻防、即ち今後の最大の黒点は最も白熱した対決点として全エネルギーをぶつけて欲しいのであります。

それでは差し迫っている九月決戦準備に追われている昨今の私であります。本日はこの辺で失礼しますが、今後いかなる弾圧にも屈せず、私の生死が三百万同胞の生死でもある以上、血肉を切り刻んでも権力に立向ってゆく覚悟で居ります。ゆえ、何卒皆様方も九月公判斗争に於ては不断に決死的戦闘態勢をととのえつつ闘い抜いて下さいますよう心よりお願いを申し上げて私のご挨拶を終らせて頂きます。ありがとうございました。

一九七四年八月一八日

東拘 石川一雄

日帝寺尾決死糾弾、狭山九月決戦絶対勝利集会にご参加
ご一同様

「糾弾・奪還・打倒」の旗の下

狭山決戦を死力をつくし闘い抜け

戦略的総路線の下、被抑圧民族・人民との革命的連帯を克ち取れ!

狭山九月決戦は、革命と反革命の大激突であり、日本プロレタリア革命の前途をめぐる一大決戦である。全同盟全組織は、戦略的総路線をより一層高々と掲げ、全人民の最先頭に立って闘い、英雄的、革命的な闘闘精神を発揮しなければならない。

戦後一貫して前衛的役割を果たしてきたベトナム解放一革命戦争は、米帝をアジアから叩き出し、旧植民地の解放一プロ独樹立へ向け、ベトナム「和平」を経ながらなお果敢に闘い抜かれていく。アジアの民衆は米帝を更に窮地に追いこみ、放逐することを目指しながら、同時にその肩代りを引き受け「大東亜共栄圏」の夢を実現しようとする日本帝国主義に対する決死の闘いを、反革命軍事政権打倒の闘いと結合して展開している。

アジアのみではない。ポルトガル・クイデータを転機としてアフリカ植民地解放の闘いは更に前進し、エチオピアでは皇帝がますます失墜している。又、キプロスでは米大使が射殺される等、総じてニクソン・キッシンジャーによって推進されてきた緊張緩和路線は激しくゆさぶりをかけられている。

ウオーターゲート事件を発端とするニクソンの辞任は、まさにこうした情勢の中でなされたのである。「来年も今年と同様二人が会えるだろう」とモスクワで語ったニクソンは、八月五日ついに「もみ消し」工作の存在を認め、「全体では無罪」と虚勢を張った三日後、「ウオーターゲート事件で議会の支持がえられなかったため、辞任する」と述べ、去った。しかし、フォードの新大統領就任によって米帝の世界戦略に変更が起る余地はない。米國務省の「対日政策に全く変化はない」という言明から、フォード来日という日米両帝国主義の積年の懸案の実現は、日米共同反革命の下での日帝のアジア侵略反革命をより一層強力に推進する梃子となるであろう。

とりわけ日帝の対「韓」侵略反革命、朴政権との結合は、「韓」国を日本経済圏に組み込むことによってインフレの昂進、資源危機、質上げ闘争の高揚という危機を脱出し、延命せんとする日帝ブルジョアジーの死活をかけたものとして拍車をかけられている。だがそれはその対極に強大なアジア人民の解放をめざす革命運動につき当りかつての「大東亜共栄圏」のまさに「二度目は茶番」に終らざるをえないであろう。ベトナム・インドシナ人民を先頭とする闘いの底力は、アジア人民の底力でもあるからだ。かかるアジア人民の決死の解放闘争を見る時、我々は日本階級闘争の立ち遅れと帝国主義的墮落という痛苦な現実に直面せざるをえない。

ない。七四春闘の未曾有の高揚と様々な「獲得物」、そして七月参院選における自民党の敗北、それを契機とした自民党内派閥抗争の激化、三木・福田・保利の辞任、反主流の露骨な田中批判という危機の中で、所信表明は勿論のこと、審議も一切行わず臨時国会から逃亡を決め込んだ自民党田中政府。それは確かに労働者階級人民の力の反映であり、とりわけ青年労働者の闘闘的エネルギーが果たした役割は大きい。にも拘らず、「国民春闘、弱者救済」路線は、強者たる組織労働者が弱者たる低所得者(年金生活者等)を救ってやるという思い上がったものであり、組織労働者の本工主義が「社会的弱者」を生み出してきたこと、それが帝国主義者によって助長されることに何ら有効に闘いえてこなかったことをかえりみないものであり、全くもって反人民的な代物なのである。その犯罪性は参院選をめぐる闘いの中で如実に露呈されていた。

「勝利」した社共は、日帝の高度成長が日本労働者人民の犠牲の上に成り立っていることを述べ、「ヨーロッパ並みの分け前をよこせ」と要求しはしたが、それがアジア人民の血と汗を搾り取ることを通じてなされてきたものであることは一言も語らなかつた。ただただ民主連合政府になれば全てはバラ色になるという幻想をふりまき、プロレスだの市民道徳だのについての三百代言をふるまっただけである。そこには、被差別大衆の苦闘や、日帝の侵略反革命一独裁政権との闘いを続けるアジア人民の魂に触れるものは全く一つもない。否、むしろその犠牲の上で安逸を楽しもうとしているといえよう。

こうした社共の本工主義・排外主義的墮落に抗して革命派は七四春闘を革命的に闘い、かつまた革命的議会議長の立場から、三里塚闘争の最先頭に立ってきた戸村一作氏と共に参院選を闘い、大きな成果を獲得したとはいえ、アジア人民、被差別大衆の闘いにこたえ、プロレタリア革命へ前進するためには更に奮起していかなばならない。狭山九月決戦、朝鮮人民の「韓」国革命一南北再統一への連帯、決起こそは、日本労働者階級がその本工主義、排外主義を克服し、蜂起一内戦への水路を切り開くためにはさけて通れぬ闘いである。

日帝のアジア侵略反革命は、中東戦争を直接的契機とする資源危機の中で、とりわけ資源の確保と「円ブロック」強化、対外市場の拡張、更にはアジア人民の低賃金労働力の利用として進められて来ている。「韓」国の馬山輸出自由地域はその典型であり、それは七〇年に朴の警察力を用いて反対する農民を排除して開設された。労働者は団結権・争議権・スト権を奪われ、朴

も非難せざるをえない程の低賃金(よくて一万二三千円前後)で長時間酷使され緩やかな肉体の死を強制されている。とりわけ女性、少年達がそうであり、生きたがためにやむをえずキーセンとして売春をする基盤は、セマウル運動一重化学工業政策の一体となった推進と共に政府によって創られ、「借金のための借金」を欠うめするための「愛国的至情」と讃えられているのが現状である。日本帝国主義は、「経済援助」「共存共栄」の名目で「韓」国人民を凌辱し、南北分断を固定化しようとしており、日本労働者人民をその尖兵にしたてているのである。

金大中事件を契機とする「韓」国民衆の決起は、まさに日帝の侵略反革命と対決し、傀儡一朴政権を打倒し、もって南北の革命的再統一を実現する闘いへの巨大な決起であった。そうであるが故に、朴は最後の切り札とも言うべき緊急措置令を発動して一切の反政府、改憲運動を禁止し、更に民青学連関係者については死刑をも含めた極刑を課すという大弾圧に乗り出したのである。しかし、それはますます朴打倒。反日帝の闘いを強化するものとならざるをえない。八・一五朴大統領選挙事件は、「韓」国人民の怒りの爆発であり、朴政権の危機の深まりを示すものである。朴は今や昼も夜も「第二の四・一九」の悪夢にさいなまれ、信頼すべき者も持たず、ただ自己の延命のために凶暴な手段に訴えるしかない状況においやられている。国内のみではない。米帝による様々な圧力、とりわけ軍事援助削減問題は朴を恐怖におとし入れ、一切を「北」の陰謀へとデッチ上げ、他方で、日本帝国主義一田中政府との結合を深めているのである。そして日帝ブルジョアジーは馬山を初めとして「韓」国経済のあらゆる部門へ進出し、中枢を握ることによって、のつびきならぬ、死活を決する泥沼にたたきこまれていくのである。

このような時期に於て、社共一人民戦線の如く「主権侵害」論をふるまい「弱腰外交」批判を行ったり、単なる援助の問題へと歪曲することは決定的に誤っている。それはまさに、「日の丸。君が代」の法制化教育勅語復活を初めとする教育、イデオロギー攻勢、排外主義・愛国主義の鼓吹に屈服するものでしかない。要求されていることは「韓」国民衆の叫びに革命的に連帯し、日本帝国主義の侵略反革命を阻止し、暴力的に打倒する闘いであり、日本階級闘争の本工主義。一國主義の汚濁を、血債を付けてふり切り、決起していくことである。

朴一帝の泥沼的危機は、日帝国内における反動攻撃、帝国主義腐朽性を利用した労働者階級人民内部の分断差別。迫害の強化をもたらすであろう。狭山九月決戦はこのような情勢の下で、戦闘的な部落大衆

と労働者人民を分断し、融和主義を増長させることによつて日本人民の帝国主義的墮落をもくろむ日帝寺尾体制と、部落解放闘争を階級闘争の不可欠の一環として闘い、被差別大衆・アジア人民との革命的連帯・結合を追求する革命派との決戦であり、全人民は後者の道を、蜂起一内戦への大道を断乎として歩まなければならないのである。

全党全人民は打って一丸、 血債・猛省をかけて狭山 九月決戦に絶対勝利せよ!

風雲急を告げる狭山闘争の正念場、決戦の時が来た。我々はこの決戦に於て何としても勝利し、部落解放闘争と日本階級闘争の結合を実現していかなければならない。そのために狭山裁判の差別性を明らかにし、同時に石川一雄氏の不屈の獄中闘争を徹底的に学び、重要なことである。

石川一雄真犯人の捏造は一朝一夕にしてなつたものでは断じてない。「部落の人間はどんな悪いこともしかねない」という一般の差別意識を巧みに利用し、部落は不良や犯罪人の巣であるごとく印象を流布しつつ、(石川氏・七・七アピール)、徹底した見込み捜査を行い、何らの確証もないまま警察は石川青年を逮捕した。そして「警察当局はその失態と面目を回復するためにどうしようも創り出さなくてはならない窮余の末に私が日頃していた、細かい『わるさ』に等しい軽犯罪を針小棒大に評価して、九・十年も刑務所に入れられる様に事を言い、一ヶ月半にわたつて私を弁護士以外に誰とも接見させず、連日威したり、甘言を使つたり、あらゆる手段に訴えて私に殺人事件を認めさせるようにし」(同)たのである。石川氏は、「殺人を認めれば十年で出してやる。認めなければお前を殺して善枝のように埋めてしまふ。認めなくともどうせ十年は出られない」という恫喝に対してあくまで無実を主張し、更に自白の強要。拷問、何の確証もないまま不当に拘禁していることに対してハンストをもつて全身で抗議を行つたのである。警察はこのハンストの間も苛酷な取調べを続け、石川氏は精神的にも肉体的にも疲労困憊いさせられていった。しかも石川氏は、部落民が主要な生産関係から排除され、社会的な差別を受けて来たことにより、社会的な「無知」の状態におかれていたが故に、警察によつて弁護士はウソつきで悪者と思ひこまされ、全くの孤立無援の中で、野球を通じて知っていた関巡査に会わせるといふ巧妙な心理作戦によつて「自白」をさせられていったのである。そこでは、予め用意してあつた証拠物などがウソの「自白」に基づいて発見されたかのような二重三重のねつ造が行われる一方、捜査過程での様々な物証や、事件と関係あると思われる人間が四名も怪死するといったことは全て意識的に無視され抹殺させられていった。このデッチ上げにマスコミが全面的に協力し、否先頭に立つて社会的な差別観念を最大限助長させ利用したことは明らかである。だがそれは同時に、わが日本階級闘争の部落差別に対する闘いの決定的立ち遅れこそが、石川一雄真犯人という権力による

捏造を許し、無実の部落青年の最も貴重な青春を奪ひ一審死刑判決を許し、十二年もの獄中生活を強いて来たことを示している。われわれはこの痛苦な過去を徹底的に自己批判し、一切の法を無視し絶大な権力としてあつた警察と孤軍奮闘し、更にこの十二年間の苦闘を通じて自己を階級形成してきた石川氏の闘魂に学び、それを決定的なバネとして狭山九月決戦を闘い、日本労働者階級人民の血債を払っていかねばならない。

狭山裁判は「部落差別に基づくえん罪」であり、結審一死刑判決策動は「部落悪の温床」と決めつけ、部落差別を強化しようとする日帝の侵略反革命体制構築にむけた重要な攻撃の一環である。それは石川氏の生命のみならず日本階級闘争の最も戦闘的な一翼たる六千部落三百万部落民の生命をも奪わんとするものであり、狭山闘争一部落解放闘争にわれわれが勝利するか否かは日本階級闘争の試金石であると言つて過言ではない。

日本共産党一正常化連による「公正裁判要求」路線は、狭山裁判の本質一部落問題を素通りし、二審最初の控訴趣意書にみられる如く、基本的には権力の捏造、一審判決を認めたと上で単なる量刑不当の問題に切り縮めるものとならざるをえない。部落問題がブルジョア民主主義の徹底化によつて解消するかのよう主張するのは、余りにも差別の現実と日本の資本主義的發展(部落民を主要な生産関係から排除し、しずめ石として来たこと、並びに人民内部の対立・分断による支配の維持に部落差別を利用して来たこと)を全く無視するものであり、帝国主義に降伏する以外の何物でもない。他方、カクマルは帝国主義的抑圧民としての「血債」の問題は勿論、石川氏の苦闘、狭山闘争の発展とは一切無関係な位置から会場問題を唯一の「武器」として反革命的居直りを続けながら、純プロ主義・経済主義を部落解放闘争に持ちこみ、融和主義的歪曲を狙っている。われわれはこれら日共・カクマルの反革命的役割を至る所暴露し、彼らの介入一闘争分裂策動を粉砕していかねばならない。「差別・無実」をかかげ、「糾弾・奪還・打倒」の原則の上につきり立ち、石川氏を生きてわが手に奪還するために大胆果敢に血債、七・七猛省精神をかけて全ての同志が決起するように訴える。

全党全人民が、かかるものとして、自己の全存在をかけて、不断の自己点検を行い、被差別大衆・アジア人民への階級的自己批判を組織化し、まさにあらゆる闘いの中にこの血債の思想、七・七猛省精神を物質化していくならば、必ずやわれわれは狭山九月決戦に勝旗を翻えすことができるであろう。そして部落解放闘争が、日本帝国主義の存立延命のための差別・分断攻撃に対して打ちこむ楔の一つ一日本革命運動の戦略的前進の糧となり、部落大衆と、日本帝国主義打倒一プロレタリア世界革命をめざす労働者人民との結合・団結を強めるものとなるに違いない。

全国の同志、友人諸君、戦闘的労働者・人民諸君!

「差別・無実」「糾弾・奪還・打倒」の原則を堅持し、一切の融和主義、「公正裁判要求」路線を許さず、総力をあげて九月結審一死刑判決攻撃を粉砕せよ! 「帝国主義の腐朽性に抗し、被抑圧民族・人民と

連帯し、共同反革命を蜂起一内戦・世界革命戦争へ!」の戦略的総路線の下、全党全人民は打って一丸、血債・猛省をかけて狭山九月決戦に決起し、絶対に勝利せよ!

日帝Ⅱ寺尾決死糾弾闘争を更に発展させ 九・二六狭山決戦の大勝利へ！

三・二二、五・二三、八・一八現地調査、そして九・三闘争と、石川一雄氏の血叫びにこたえ、その不屈の獄中十二年の敢闘精神に学ぶ、「糾弾・奪還・打倒」の闘いを、全身全霊をこめて闘い続けてきたすべての同志、友人、兄弟達！

八・三一〜九・三の過程におけるわれわれの日帝Ⅱ寺尾決死糾弾狭山現地ハンスト闘争と、九・三東京高裁大包围の一大攻防戦は、いまや狭山九月決戦の一大正念場として、日帝Ⅱ寺尾をおいつめ、その反人民的・反階級的性格をあげだし、石川一雄氏の不動の不屈の英雄的革命的姿をますます鮮明なものとしてうかがひあがらせてつづける。

いまやわれわれの闘いの推移は、無実の獄中十二年の石川一雄氏を、生きて被差別大衆、人民の手に奪還するのか、それとも暗黒の差別の歴史のなかに人柱として葬り去るのかの一大岐路にたちつつあり、又日帝Ⅱ寺尾は五・二三、二万人人民の大逆襲、九・三、三万人人民の大反撃、決死糾弾の憤怒の渦におそれおのき、支配階級としての命運をかけて、結審死刑判決策動の道を急ぎつつある。

九月狭山決戦のつまりは日本階級闘争の一大攻防環として、すべての労働者、被差別大衆、最も抑圧され続けてきた人々を震い立たせ、石川一雄氏の奪還は、今後の一切のあらゆる敵階級との対決、戦争的死闘の絶対的カギとして、日本労働者階級人民の共通の課題としてがっちり、大地に根をはってすえつけられている。

いまやあの「日帝Ⅱ寺尾とさしちがえることも辞さぬ」(九・三アピール)という巨大な革命戦士として登場した石川一雄氏の血叫びに心を動かされず、その不屈の敢闘精神に学ぼうとしない日本人民は一人でもいるだろうか。

「太陽も月も星空も仰ぎ見る事もできない」(五・二三アピール)長い獄中生活の中で、自己修養と研鑽をかさね、権力犯罪の不当性をあげ、部落解放の道標たりえている、その謙虚でひたむきな英雄的姿に深い感動をおぼえず、連帯をもとめず、権力の酷い策謀にその人生を終らせてしまうことを許せる人間は、一人でもいるだろうか。

われわれはどんな日帝Ⅱ寺尾の攻撃にも怒りにみちた反撃、階級的報復をなし、何としてでも、何をしてでも、必ずや生きて被差別大衆人民の手に、即時石川一雄氏を奪還するのだからならぬ。

又より深く、より根底的に、本質的にわれわれの主体面をとらえかえし、血債・猛省の精神をつちかい、徹底して部落大衆の闘いに学び、日本人民の差別・抑圧の歴史を、己の歴史性として痛苦に、心から、魂

の奥底から反省することもますます問われている。

誰が狭山差別事件を権力につくりださせ、石川一雄氏を獄舎にしばりつけてしまったのか。われわれの闘いが如何に不十分性をはらんでおり、現に存在している被差別大衆人民にとり無縁なものでしかなかったのかを、怒りをこめてふりかえり、己れ自身の歴史性に対しつきつけていかなければいけないのだ。

又そうであるからこそわれわれは、この狭山九月決戦を、日帝Ⅱ寺尾が石川一雄氏に指一本ふれることさえ許さず、髪一筋さえ奪いさらせない不退転の決意をもって、われわれの持ちこたえている全思想性、主体性をかけて連日連夜闘いつづけるのでなければならぬし、石川一雄氏の最終陳述としてある九・二六公判闘争には、九・三を倍する動員、持てる力のすべてをつくした結果をもって応え、「糾弾・奪還・打倒」の決戦的火柱を日帝Ⅱ寺尾につきつけていくのでなければならぬ。

われわれの猛攻につぐ猛攻、反撃につぐ反撃のみが日帝Ⅱ寺尾を追いつめ、階級攻防の勝利をつうじ、無罪判決をひきだし、石川一雄氏の奪還を唯一保障するものであることは全く明白なのだから。

これまでの八・三一〜九・三狭山現地駅頭―市役所前でのハンスト、日帝Ⅱ寺尾決死糾弾闘争と高裁大包围戦の爆発により、われわれがすべての闘う人民、被差別大衆の血と汗の苦闘の中でつかみとり、打ち固めたものは次のようなものである。

第一には三・二二暴挙五・二三実質審理打ち切りと続いた日帝Ⅱ寺尾の結審死刑判決策動に対し、日帝Ⅱ寺尾決死糾弾の實力闘争をつきつけ、又三万人人民の大反撃、大逆襲を実現することにより、狭山九月決戦絶対勝利のキリクチをつくりだしたことである。

五・二三、二万人、九・三、三万人とますます結集力を強め、団結を固めつつある被差別大衆・人民の輪の拡大に対し、もはや寺尾は身動きできぬ正義、絶対的無実という真理をつきつけられ、その差別的階級反動的反人民的性格をあらわにすることにょってしか、階級的抑圧・弾圧の方途を何一つ持ち得なくなっている。しかしながら反階級的、反人民的の不正がまかりとおればとおる程、人民の正義の闘いはますます高揚し、発展するのだという真理を、九・三大逆襲三万人人民決起はあまねく満天下に示らした。この大高揚、大結集こそ狭山九月決戦絶対勝利の証であり、一大突破口であったことをわれわれははっきりと、明確につかみとるのでなければならぬ。

ハンスト突入と、同日十時の県警二五〇名を動員しての大弾圧、西武資本と県警の共謀による撤去策動攻防戦や、その後の狭山市役所前でのハンスト戦をつうじ、われわれは日帝Ⅱ寺尾の悪どい、差別的偏見と予断にみちた攻撃を身をもって体験し、又広くそれを全人民的に共有した。かつて十数年前一部落青年であった石川一雄氏にかせられたのと同じ性格の狭山署の差別的暴挙こそ、日帝Ⅱ寺尾体制の先兵としての役割りなのであり、この事実、この本質は闘うすべての人民の怒りを喚起し、日帝Ⅱ寺尾が如何に反階級的反人民的性格のものであり、被差別大衆・人民の未来と相容れぬものであるかを、この闘いに参加したすべての労働者、学生は狭山市民と共に実感した。

権力の暴虐を実感し、体得した人民が次になすのは、それに倍する階級的報復、大反撃である。その意味で、この八・三一〜九・三の闘いは、権力の差別・抑圧、日帝Ⅱ寺尾の反人民性を、徹底あげ出す闘いとしての位置を持つと同時に、狭山差別裁判そのものの反人民性、差別性、虚偽性をえぐりだした。つまり石川一雄氏の絶対無実、事件そのものの差別にもとづくデッチ上げの不当性が、闘いのなかで明確にとらえられ、つきだされたのである。

第三にわれわれ闘争主体の問題としてとらえかえした時、八・三一日帝Ⅱ寺尾決死糾弾戦や九・三高裁大包围闘争の高揚は、血債・猛省をつうじた純プロ主義派に対する被抑圧民族・人民派の闘いの内実とその正当性を一定さし示すものとしてうち抜かれた。

われわれの決死糾弾ハンスト戦や九・三高裁大包围の結果は、まだまだ不十分なものであり、確かに獄中十二年の石川氏の苦闘や部落解放同盟の血史に比ぶれば、全くはずかしいものでしかないが、しかしともあれわれわれは石川氏の血叫びに精一杯連帯し、敢闘精神に学び、こたえんとする闘いを、われわれの現在の力量のなかでなんとか作りだそうとしてきている。

七・七猛省集会やそれを前後する整風をつうじ、われわれが打ち固めねばならぬものとして追求してきた血債・猛省の精神が、少しずつではあっても発揮されつつある。

石川一雄氏の血叫びにたしかにまだ数分の一も応えきってはいないが、このような闘いにとり組めるようになったこと、これはこの間の主体面での切開をかながみた場合、われわれにとっての小さな勝利的意義である。

より一層内省を深め、作風を正し、被抑圧人民の血の暴虐の、被差別の歴史に学びきるためにも、更にわれわれは現在を倍する隊列をととのえ、血債・猛省の精神をつちかい、狭山現地ハンスト戦を粘り強く打ち抜く必要が、だからこそ絶対的にある。

かかるごときこの間八・三一〜九・三闘争の過程において、われわれが被差別大衆人民と共につかみとってきたものをふまえ、狭山九月決戦のなかの一大決戦、日帝寺尾打倒の攻防環としてある九・二六石川一雄最終陳述公判闘争へむけた、闘いの任務を次に確認するならば、次のようなものとして対象化される。

第一には九・三を倍する大結集、石川氏の血叫びにこたえうる大動員を持って高裁を包囲し、「糾弾・奪還・打倒」の火柱をより巨大に燃え立たせることにより、日帝寺尾の結審死刑判決策動を、最終的に、徹底粉砕し、こな微塵に打ち砕くことである。かくして石川氏を生きて奪還する条件をつくりだし、寺尾徹底糾弾の鉄火をつくりだすこと、これが九・二六最終陳述公判闘争へむけた、最大の、われわれに課せられた絶対的任務である。

九・三を倍する人民の結集、大反撃においてのみ寺尾は押しまくられ、階級攻防の中で敗退し、そこではじめて石川氏の無実が宣せられるのだということは、はじめからこの狭山差別裁判が、部落民を犯人にしたてあげるといふ権力のデッチ上げ犯罪であるが故に、法廷が決して真実を追求するものとしてないという性格を有していることによっても明白である。三百万部落大衆の怒り、人民すべての差別糾弾の大反撃のみが、日帝寺尾打倒の唯一の力である。

第二にはそのためにもわれわれは、八・三一以来の狭山現地でハンスト戦を更に継承させ、発展させ、日帝寺尾決死糾弾

の闘いの輪を押し広げつづけるのでなければならぬ。

権力犯罪の不当性を更にあばきだし、石川氏の無実を証明し、又それと連帯する人民の意志を日帝寺尾に押しつけていくのでなければならぬ。

主体的には血債・猛省をも内包し、それをパネとしたハンスト実力闘争の持続的、圧倒的、決死的貫徹こそが、九・二六へ盛り上がる人民の闘いの意志を代弁し、寺尾への一大打撃を与えるものであることは、全く明白である。

更に県警狭山署を追撃し、差別裁判の不当性をめぐりだし、決死糾弾の生命を賭した闘いによって、日帝寺尾に迫りきり、「糾弾・奪還・打倒」の火柱をつくりあげること、かかる実力闘争の不屈の貫徹こそ、無罪判決をひきずり出す第二の要因である。

第三には第一、第二の闘いの全身全霊をかけた取組み、貫徹をつうじ、そこに石川氏の不屈の敢闘精神と血叫びに学び、応えんとする自己を投影し、血債・猛省精神を更につちかうこと、徹底して被差別大衆・人民の立場にたちきり、その観点から権力と対峙する共産主義者へと、自己止揚を追求すること、これが主体面をふくめたわれわれの第三の任務である。

三百万部落大衆のすさまじい闘魂、気迫、老人も子供も、すべての階層の人民が石川一雄氏の運命に自己の未来を投影し、決死に闘うその雄々しく巨大な姿、われわれはそれらのすべてを学びとり、われわれ自身を人民の兵士として、人民に奉仕し、人民

のためになることのみをおこなう存在へと、必死になって自己変革させなければならぬ。

徹底して血債の思想をつちかい、猛省精神を打ち固め、不退転の人民兵士へと自己をつくりかえる闘い、そこにおいてのみ狭山差別裁判勝利の革命的意義をつかみきり、差別者としての自己との訣別をはかっていく過程、このような過程を狭山九月決戦のなかでつくりだし、完遂することがなければ、われわれには決して差別を糾弾する資格など持ちえないし、ましてや闘争の勝利は無味な色あせたものへ転落してしまわう。

その意味でも九・二六最終陳述公判闘争を石川氏の血叫びにこたえ、敢闘精神に学びきる切開をつうじかちとることは、第一、第二の任務を担い切る内実として、徹底追求されねばならぬ。

全国の同志、友人、兄弟達！
日帝寺尾を更に追いつめ、とことん追及し、大反撃を加え、石川氏の苦闘の十二年に心の底から連帯し、生きて被差別人民、大衆の手に奪還すべく、以上の三大任務のもと、われわれの全思想性、主体性をかけて九・二六最終陳述公判闘争の一大爆発をかちとろう。勝利をかちとろう。

☆血債・猛省をかけて狭山九月決戦絶対勝利！
☆日帝寺尾決死糾弾！ハンスト貫徹！
☆結審死刑判決策動粉砕！
☆狭山差別裁判糾弾！石川氏即時奪還！日帝寺尾体制打倒！

朝鮮人民の血叫びにこたえ 日帝・朴の人民抑圧を打破れ！

昨年八月八日、東京のあるホテルで拉致された、「韓」国の元大統領候補であった金大中氏が、十三日夜に傷だらけでソウルの自宅付近で放り出される(後にKCIAによって仕組まれたことがバクロされる)事件が起った。以降、いわゆる「金大中氏拉致事件」は、「韓」国人民・学生、日本の労働者人民の大反撃を呼び起こし、朴軍事独裁政権の暗黒の人民支配が鮮明に内外の人民にバクロされ、そして日本帝国主義、田中自民党政権と朴軍事独裁政権のどす黒い結合、朝鮮に対する日帝の侵略反革命の実体ははっきりと人民の前にバクロされた。打ち続く学生の英雄的決起に対する厳戒体制をもつてしての血の弾圧、日本人二名に対する弾圧、キリスト者をふくめた広範な人民に対する検挙、重刑判決は、起こるべくして起った八・一五朴ソ撃事件以降、大統領緊急措置一、四号を解除したところで、人民をばやだまし通すことのできない朴軍事独裁政権のポロポロのモスラージュでしかない。もはや朝鮮人民の怒りをおしどめるとは絶対にできない。

「金大中事件」とい、今日の事件(早川太刀川逮捕事件)とい、日本国内でのKCIAの不法さわるるスパイ謀略活動はゆ

るすことのできない悪質な主権侵害だ」とい、日帝に強力な外交措置を要求するといふ日本共産党の骨の髄までの議案ではない。金芝河等に対する死刑判決に抗議して7月16日からハンストを行った在日朝鮮人民の金時鐘氏は、朴正熙を育て上げたのがほかならぬ日本帝国主義であり、自らもその日帝支配のために祖国を追われ日本に流れ、日本にいまなお住んでいることを考えあわせながら、「日本の支えがあるから、朴正熙は平気でものすごいことをやる。我々はいまだに日帝の亡霊から逃れられないのか」とうめいたことを、はっきりと我々自身につきつけなければならぬ。日本プロレタリアートの名において我は、このことばに答えなければならぬ。

八月の一年の経過

八月金大中氏事件発生。事件の真相究明を要求する日朝人民に対し、日帝は、「日韓友好の堅持」を強調し、はやくも朴政権ヨウ護の態度をうち打す。しかも田中法相の「某日の秘密警察の仕業」なる発言が青嵐会によって批判されるといふところまで

自民党の反動化は進行しているのだ。李厚洛中央情報部長は、「私の機関員が一人でも関係していれば責任を取る」とぬけぬけとしらを切ったのである。

九月に入って、駐日大使館の金東雲書記官の容疑が固まるのに対して、日帝田中は「主権侵害だといえぬ」とい、韓「国では新国民党一享の「中央情報部の仕業である」とは三歳の童子でも知っている」という発言さえ弾圧されていく。そして日帝は日韓協力委開催を通じてますます露骨に侵略反革命をなさんとし、三井、東洋工業等独占体も「韓」国の進出を決定するのである。

十月に入ると、これまで朴独裁政権の下に沈黙させられていた学生達が、二日のソウル大理学部デモを突破口に闘いはまたたくまに広がり、「情報ファッショ統治の中止」「対日隷属経済の自立化」「中央情報部の解体」「金大中事件の真相究明」をかかげ、「自由か死か」と叫んで英雄的に決起した。朴政権はこれに対して暴力的にこれを弾圧するのである。もちろん「韓」国にあっては、「大学の自治」なる一片の幻想すら生みだされる余地のないほどKCIAの公然たる介入が行われており、学生デモは文字通りギリギリの抵抗であり、決死の闘いであるといえる。

十一月に入ると日「韓」反革命政権は、学生の決起にあわて、「韓」国側が金大中氏の海外での言動を不問にし、金東雲書記官を免職にすることを条件に「事件」の「解決」を表明し、金大中は自由になつたとデタラメな宣伝をおこなうのである。

こうした日「韓」反革命のゆ着に対し、学生は、朴独裁政権と日帝の侵略反革命に對して闘いをいどみ、新聞記者までもが朴政権の言論弾圧に抗議してストに入るのである。

十二月、こうした全国に波及する反朴闘争に對して、朴軍事政権は、内閣改造をもつて人民の怒りをかわそうとしたが、ますます燃え広がる人民の闘いが、明確に朴打倒に向かい始めるや二十六日日韓関係会議の開催後、「維新体制」を否定するものとさめつけ弾圧の準備をおこなうのである。

そして一月、日帝との意志統一を行つた朴は、八日突如緊急措置第一号を發布し、一切の体制批判はもろろん、そのような動きを報道することも禁止、同第二号で設置した非常軍法会議で最高十五年の刑という弾圧をかけたのである。これ以降、野党の黨員、キリスト者等も含めた大量逮捕の暴挙に出、日帝田中はこれを黙認するのである。

一九六〇年の四・一九李承晩政権を打倒した学生の英雄的決死的闘争の成果を張勉内閣をクーデターによって打倒することによりすべて纂奪した朴は、六九年には、これまたあらゆる手段を公然と駆使して大統領の三選を認めさせる為「憲法改正」を行つた。これは野党議員に秘密に改憲案を通過させ、国民投票では、買収から、反対者には通知票を送らないという形の実にデタラメなもので、しかもそれでも安心してきず、改憲反対の集会、しかもデモを一切禁ずるといふものであった。

これほどまでのことをなした朴は、しかも自らの支配に安住することができず、人民の急速な離反におそれをなし、なりふりかまわず人民弾圧を強行した。これがいわゆる72年十月維新である。これまで自らがかつてに作つた憲法に對し、これに反対する人民を徹底的に弾圧してきた朴が、逆に自らこれを廃止し、非常戒厳令を発し、国会を解散し、憲法を停止し、同年十二月に新憲法を公布、五十三条で大統領に非常の場合、独自の判断で迅速な措置を講ずる権限を与えたのである。これが大統領緊急措置であり、徹頭徹尾反革命人民弾圧の公然たる宣言ではないのか。

一月二十四日衆議員本会議において日帝田中は、はからずも、自らの野望を明らかにした。すなわち、日本の朝鮮植民地支配の時代を「合邦時代」と呼び、「韓」国の人はその「合邦時代」に「日本からノリの栽培を教へてもらった」ことを感謝し、「日本の義務教育制度は今日でも守つてゆけるすばらしいものだ」と述べたのである。

ここに日帝の朝鮮植民地時代の一切を美化し、それどころか今また新たな侵略反革命の根を「韓」国に深くおろしつづつある日帝の野望をはつきりとバクロしている。それどころか、もはや経済過程においては日帝はもはやぬけ出しえないほど「韓」国経済に侵入し、朴軍事政権をたてて朝鮮人民の生き血を吸いはじめていることをはつき

りと見ておかねばならない。昨年中に認可された外国人投資三億一四〇〇万ドルのうち、その九三パーセントに当る二億九五〇〇万ドルは日本人によるものである。この一つをとってみても他国の例とは比べものにならないほど日帝の侵略反革命の実体は明らかとなる。馬山の輸出自由地域では百一〇の企業のうち八十余が日本企業で、しかも、外日企業では、労働者の団交権やストをみとめられず、日給二百円にも満たない低賃金で女子労働者は働かされているのだ。

三月に入つて、日韓合同経済委員は民間の経協力を確認し、大統領緊急措置令で一時沈黙させられていた学生は、二十一日慶北大で「反独裁民主救国宣言」を發した。

そして四月三日、ソウル大、成均館など大学の学生が朴政権打倒を叫んでデモに決起し大衆の決起をピラで訴えた。これに對し朴は増々反革命の嵐をむき出しにし、「民青学連事件」をデッチ上げ、緊急措置令第四号を發令、民青学連関係者は五年以上の懲役または無期及び死刑、という攻撃をかけ、千人以上の学生、宗教人等を令状なしで逮捕、日本人二名をも逮捕したのである。

五月には金芝河も第四号で逮捕され、六月には金大中まで古い選挙違反容疑で起訴するのである。

七月に入り朴政権は、日本の参院選に合せて非常軍法会議を中止し、日帝田中に對する人民の怒りをそらせることに側面から援助を与え、参院選が終るや、急ピッチに再開し、死刑十四人、無期十五人、懲役二十年二〇人、同十五年六人という極刑を課してきた。

そして八月十五日のソ撃事件を機に、「韓」国人民を反革命的に統合し、「北塊」キャンペーンを更に拡大させて、在日朝鮮総連に對する弾圧を公然と日帝に要求するところまでできており、文字通りの反革命軍事独裁のツメをあらゆる人民に向けてきている。

☆ 朴軍事独裁政権の危機と日帝の侵略反革命

朴政権はにもかかわらず、増々危機へと追いつめられている。いかにどれほど人民を弾圧しても、必ず数百倍の人民の血の怒りによって必ずほうむりさられることを一番よく知っている朴は、だからこそ、自らの支配の支えを日帝に求めざるをえないのである。

62年クーデター以降、経済の復興と「反共」を旗じるしに登場した朴は、ようやくたちなおりをみせ米帝にかわつてアジア侵略反革命に乗りだした日帝と命運を一つにすることに自らの政権を維持せんとしてきたのだ。

とりわけ65年の日韓会談以降急速に日帝の援助を導入し、急激な経済成長をとげた。しかしながら、にもかかわらず、その内実は、国内資源の乏しい「韓」国にとっては輸出に延命の道をたどらざるを得ず、当然の結果、労働者人民の劣悪な低賃金労働をしいてきたのである。もちろん、そのことは「韓」国人民を「貧困からの脱出」へと導くどころか、日帝資本のかけこみへのえじきと化してしまつていことは言

を待たない。

64年の四・一九4周年記念の際、学生が、「経済的自立を叫ぶ政府は、労働者、農民らの消費大衆に、失業と飢餓賃金・殺人的な物価高をおしつけ、一方買弁的民族的資本の肥大化を助けた。国際協力という美名のもとに、わが民族の不具戴天の敵日本帝国主義を引き入れ、対米依存の半身不随の韓国経済を二重の隷属の鉄鎖にしばることが、祖国の近代化に對する近道だと欺まんする策謀がこらされている……」と述べたことは今もなお、いやそれどころか増々正しく朴軍事政権の本質をついている。

韓国の労働力の70%は輸出産業に向けられており、外国資本の為に安い労働力市場を提供している、これは、朴政権が米価を抑制し、極端に貧しくなった農民を低賃金労働力として外国資本のえじきとしていのである。

新聞の報ずる政府発表によれば、いま全農家の三四パーセントが小作農に転落しているという。農地改革で自作農になつたはずの農民が、朴政権の初期に比べて三一・八パーセントも増加しているのだ。株価は一年前と比べ二四・四パーセント下がり、卸売物価が四七・パーセント上昇し、輸出は六月にも前月に比べ六・六パーセント減少、その結果工場の稼働率は二〇パーセントから三〇パーセント程度におち、失業の嵐がせまってきた。

しかも、朴政権は、昨年末で五一億三千万ドルの対外債務残高をかかえ、今年の元利返済額は五億六千万ドルと見込まれているため外資の導入がなければ経済そのものが破産してしまふほどなのである。だからこそ、人民の湧き上がる不満をおさえ込み、朴自らの軍事政権を守りぬく為には、日帝の支えによる経済援助と「反共」による国民統合、「反共」をテコとした人民分断、抑圧の徹底した反革命独裁の強化以外には方策がないのである。

こうした朴軍事政権に對して、65年以降急速にアジア侵略反革命のキバを出しはじめた日帝は、まさしく自己のえじきとして朴軍事政権を支えつつ米帝に変わつて朝鮮人民を新植民地的支配の下に置き、更に侵略反革命を強化することによって自己の帝国主義的野望を達成せんとしていることは、当然のなりゆきであり、現に日帝田中は、その突撃のラッパをふきならしているのである。

☆ 七・七猛省精神、血債の思想を持って朝鮮人民の決死の闘いに呼応し、日帝の侵略反革命を粉碎せよ

(以下次号)

勝利の絶頂 公戦決山狭 9/3.5.10.26 10/3.20.24.26

日高川 寺屋決死糾弾狭山 現地ハンスト突入宣言

三百万部落大衆の皆さん、全ての労働者人民諸君、
全国労共闘、筑波共闘、高共闘は、無実の部落青年石川氏にかけられた日
帝、寺屋の九月結審、死刑判決策動に対し、狭山現地で決死糾弾ハンスト一
ヶ月に突入することを宣言する。

警察、検察、浦和地裁、高裁、寺屋の部落青年石川氏差別テツチ上げ犯罪は
け、して許すことはできない。

警察は、①現場付近でみつけたスコップ一本（実は複数であることを隠し
イ）を石田豚屋のものとしてテツチ上げ、犯人は部落民とはかり部落への集中的
見込み捜査を行い、②石川氏を不当別件逮捕し、一ヶ月に及ぶ拷問を加え、③
証拠（万年筆、時計、カレン）をテツチ上げ、（関巡査をつかって万年筆を石
川氏宅にしかり、二セの時計を石川氏に見せてからしかけ、二セの皮カレン
の本物は一見皮製に見えるタレスカレン）を事件二ヶ月後にしかけ、発見さ
せた、④死体を「逆さ吊りにした」という形跡なし（鑑定）と二セの「自
白」を強要し、石川氏を残酷な人間と描き出し、「部落民は恐ろしい」という
差別的偏見をまき散らし、⑤犯人の地下たび足跡石高を石川家押収地下たびと
あわないとして石川氏起訴後隠滅した。

検察は、一審論告で喜枝さんを「学業成績優秀、性格は明るく責任観念が
強く、……可々のものに敬愛され」と美化し、「純真な善枝を残忍さねまじ
ない石川一雄が誘拐、縛りつけ、強姦し、殺害した」と差別的偏見をあおり
たて石川氏を死へ追い込もうとした。

地裁内田は、弁護側証拠、証人を可々却下し、六ヶ月のスピード審理
で無実の石川氏に死刑を下した。二度の徹底家宅捜査で万年筆が発見されな
かったことを「発見しやうい所だからかえって盲点となって発見できなかった
たとも考えられる」と白を黒といいくるめるまやかして警察のテツチ上げを
助けだ。

高裁、寺屋は、「警察には作偽性はみとめられない」と石川一雄の自白には信
頼性があると差別を深め、弁護側証拠、証人をほとんど却下し、真実が
露見する現地調査からも逃亡し、九月結審、死刑判決策動をおし進めている。
かかる権力のどす黒い差別犯罪を許すことができないか。

無実の石川氏を即時奪還せよ。

石川氏は絶対無実だ。石川氏にはアリバイがある。①事件当時、八百屋の
若い者と話しをした。②荷小屋で野球試合帰りの中学生と石田豚屋のトラッ
クを見たと言っている。③妹美智子さんは、音遣状を届けたとされる当時
ごろ帰宅したと、又石川氏は豪雨にもかかわらず、さしてぬれていなかっ
たと証言している。

石川氏は、警察の拷問に一ヶ月のハンストを抗議し、今十二年に及ぶ獄中
弾圧に不屈の闘争精神で闘い取っている。われわれは石川氏の血叫び答える
べく決起する。

われわれは心ある人民に訴える。無実の石川氏を産んで見殺しにするのか
、それとも権力の差別犯罪を徹底糾弾し、血償をけ、生きて石川氏を奪還す
るのか。ともに九月狭山決戦を闘い抜かん。

Q1 狭山九月決戦絶対勝利総決起集会 Pm 20 狭山中央公民館